



## 両生類の生態とトキの餌場環境のあり方

関谷國男（教育支援員、元理学部）

両生類はトキの餌生物として胃の内容物や糞の分析、採餌時の直接観察などを通して確認されてきた。餌生物の中で両生類の占める割合は大きく、トキが好んで食べる餌生物として餌場環境と密接な関係を持つことが考えられる。トキの主たる生息環境、餌場環境は里山の生態系、水田の生態系の中にあるがここは両生類が好んで生息、繁殖する環境でもある。

両生類は変態するまでが幼生期で水中生活、変態後は陸生生活をおこなうが成体も水の無いところでは生活できない。しかし、それぞれの種類の繁殖行動や生態は多様でカエルとかオタマジャクシ（幼生）の一言で表すことはできない。

佐渡に生息する両生類は、最近見出された新種のカエルを含めると 9 種でそれぞれが多様な生き方をする。トキの餌生物として関連をもつ特徴をそれぞれあげると、

アカハライモリは生息、繁殖の場所として水田や湿地を長期間利用する。越冬に際しては湧水などに集まるので水田餌生物として活用されるだけでなく、湧水の地域は冬場の限られた餌場として重要になる。

クロサンショウウオは幼生期が春先から秋口までと長い。幼生の好む水深はトキの採餌場としてはやや深めの所になるが写真に示される水深の水場は程良い餌場となる。トキは濁った水中を少し開けた嘴を左右に振り触感で餌を取る。水深が足りないと嘴を左右にふれない。

ヤマアカガエル 幼生は 3 月末ごろから 8 月頃まで幅広く、水田、湿地、ため池などで育つ。成体は早春からの繁殖期で産卵を終える林間に移動するが秋になると繁殖地の水辺にもどる。冬季には流れのある川や止水の水中で越冬することも多いので冬場の餌生物としても活用できる。繁殖地と林間を移動する際、3 面張りの U 字溝の犠牲になることが多い。

ニホンアマガエル 水田や小さな水場を活用して繁殖。水田の中干しの犠牲になる幼生は全滅状態にはならないが犠牲は大きい。

モリアオガエル 通常木の上で産卵するが、佐渡の場合水田の畦で産卵することが多い。水田で産卵するとニホンアマガエル以上に中干しの影響を受ける。

ツチガエルとツチガエルに近縁な新種 (*Rana* sp) 水に対する依存度の高い種で年間を通じ周囲に水がないと生息できない。幼生は翌年変態をするので中干しにあった幼生は全滅する。

アズマヒキガエル 皮膚に有毒物質を含むので餌として活用できない可能性が高い。

ウシガエル この種も幼生で越冬するので冬場の餌生物として期待できるが水深のあるところで越冬することが多いので幼生は活用しにくい。

これらを踏まえいくつかのあり方を考察する。